

第七条 座敷謡の事

底本…高知本 対校本…鴻山本・演博本

【翻刻】

第七 座敷謡之事

拍子の謡ハ鳴物にまざる、事も有へし。すうたひハふしの善悪も程拍子あひも、すこしのつまつきまできつかりと
頭れ、地のさそうに至るまで、其人のぶたしなミと①しらるゝ。其会の謡の番組の通、②心得する事、上手芸也。
③たとへハ不断流通の人なりといふとも、放心せざるを名人とせり。扱其座敷小座敷にて、同音も不人、聞人もす
くなきときハ、大かた調子ハ平調にうたひてよし。但我心のうちに吟してみるへし。平調なれハ、よきといふて
も、生なからにして平調の調子に④かゝる人ハ、いかゝすへし。平調にかきる⑤と（いふハ）ひか事なり。其人ハ
我心にかなふ調子可然候。

扱大座敷数人の時ハ、双調にうたひよろしかるへし。双調叶ハすハ右之ことし。此二調子の高下の程を知事、第
三十の所に委細にしるせり。扱シテワキとモに心をさためて、祝言幽玄恋慕哀傷の音声、其程くうたひ出すへ
し。惣してワキかた、我声のよきをきかせんとて、不功人ハ大夫にもかまわす、調子をかへて、ゑしやくもななく
たふ事、傍若無人也。其相手くのかたへ調子尋ル事、秘事也。

ワキ方うたひの次第ハ大臣ワキハちよくしなれハ、初よりいかにもうずたかく謡ふ事也。神しよくのワキ大かた同前。是も、すこしの替りの有とも、用て益なき事也。僧ワキ、下僧上り僧の違ひ有といへとも、是も益なし。大ていにうハにするりとうたふへし。関守などハいかにもしほれぬ心を持って、つよ／＼とうたふへし。人あき人、⑥是もしほれぬ様に、あら／＼と⑦うとふへし。

論義とい懸の事⑧ (大臣ワキ神霊への) といかけ論儀うやまふ心持有へし。田夫のあひしらひとハ各別たるへし。また、あふむ小町などの類ハ、田夫とはちかひ有へし。僧ワキも、名僧貴僧田夫といかけ論義、前の通。但女の類、(チワラ)児童のるいハ、しとやかにといかけてよし。まほろし夢中の人にことはをかハす事、一虚一実哀殺の音といへり。いつれの家にも、この音声、秘蔵の事なり。

物狂に論義ハ、僧俗のワキともになうすくしからせず慥ニことハる事也。下人へのあひしらひ、又其心得可有候。鬼神またハ人を打ワキ、論義といやうすこしもよわミをあらせず、おもしろくもなく、きひしく心にうたふへし。右の条々、かやうにかきしるせハとて、りきミを付あまりうまくにせるハ、かへつて大きにきらふ事也。ワキ謡ハ音曲がらせず、たゝする／＼とうたふ事、大夫への時宜也。大夫心持同前、此等の義ハ書進上いたすに不及。其謡／＼に自然にさたまり有事に候。乍去、此心得にうたひ不申候へは達者とハ難申御入候。

去年、有吟味したかり給ふ人の前にて、清経の曲舞よりきりまでを所望によつてうたひ候へハ、過後、修羅のうたひやうにハすこしよハく聞へ候と申されき。返事に、修羅もしゆらによる事に候。清経ハ左中将にて公家なれハ、武将の修羅より(モカ)少よハく我家にハうたひ申也。仏経に現在の果を見て未来をしようと金言御入候とこたへて御座候へハ、一座けにもといふ人おほし。

さて又太夫ツレワキツレともに、つれにたつ人よりも調子をめらせてうたふ習ひ也。太夫うたひ出しよりハ一字分中ほと、ツレをそく付てよし。太夫と申し出やうなれハかならずそろハぬ也。其後ハ太夫の謡を取入て、一口にうたふ物也。⑨ (太夫とそろはぬはちじよくなり。)

惣してツレ、ワキにかきらす、鳴物、狂言にいたるまで太夫に随ハすといふ事なし。又地の謡やうも右の心持によるへし。さりながら、地うたひハいつれもそのしな⑩よりも、すこしつよくうたふ事ならひ也。

【校異】

- ① しらるゝしらるれ (鴻・演)
- ② 心得―得心 (鴻・演)
- ③ たとへハ―たとへ (鴻・演)
- ④ かゝる―かゝらぬ (鴻・演)
- ⑤ と―といふハ (鴻・演)
- ⑥ 是もしほれぬ様に―これもしほれず (鴻・演)
- ⑦ うとふ―うたふ (鴻・演)
- ⑧ 高ナシ。演・鴻より補う。
- ⑨ 高ナシ。演・鴻より補う。
- ⑩ より―よりより (衍字か) (鴻・演)

【現代語訳】

第七 座敷謡について

囃子に合わせて謡う謡は、囃子の音に紛れることもあるだろう。囃子のない素謡は、ふしの謡い方の善し悪しも

間拍子も、わずかな失敗まで際立つて見えてきて、地謡の粗相に至るまでその人の心得がないことがわかってしま
うだろう。その会において、曲の順番や状況など、よく承知することは巧みな芸である。たとえ普段から謡に精通
した人であったとしても、油断なく緊張感を持ち続ける人だけが名人とされるのだ。

さて、その会場が小さい座敷で地謡もおらず、聴衆も少ないときは、だいたい音の高さは平調で謡うのが適し
ている。ただし、あらかじめ自分の心の中で謡って確認すべきである。平調の高さであればよいといっても、生ま
れついて平調の高さではない人はどうしたらよいのだろうか。平調に限るといえるのは間違いである。そのような人
は、自分の気持ちに合った音の高さで謡うのがふさわしい。

ところで、会場が大座敷で謡い手が数人いるときは、双調の高さで謡うのがよいだろう。双調の音がとれない時
は前に述べた通りである。平調と双調の高さの違いについては、第三十条「十二調子聞分図」に詳細を記してい
る。

さて、素謡では、シテ・ワキともに音の高さのイメージを心に抱いて、祝言・幽玄・恋慕・哀傷のそれぞれの音
声の種類にに応じて、謡い出すべきである。

概して下手なワキ方は、自分の声のよさを聴かせようとして、シテ謡の者に気をかけず、音の高さの具合を変え
て、遠慮もなく謡うのは、傍若無人なことである。事前に相手となる方々へ音の高さなど具合を尋ねることは秘事
である。

ワキ方が謡う次第の部分では、大臣であるワキは勅使なので、最初からとても気高く謡い始めることが大切であ
る。神職であるワキの場合も大体同じである。わずかな違いがあっても大したことではない。僧であるワキには上
僧、下僧という違いがあるといわれるが、これも大したことではない。おおよそ柔和に滑らかに謡うのがふさわし
い。関守などは、いかにもシャキッと萎れない心持で手強く謡うのがふさわしい。〈自然居士〉など人買ひワキの
場合も萎れないで、荒々しく謡うのがふさわしい。

応答や問答について、大臣ワキが神霊のシテに問う応答は、尊ぶ心持がふさわしい。農夫など田舎風情なシテに對する受け答えとは、区別すべきである。また、〈鸚鵡小町〉などの曲は田舎風なシテとは違っているのがよい。僧ワキは名僧や貴僧が田舎風情のシテに問う応答の場合、前のとおりである。但し、シテが女性の曲や稚児が出る曲は、しとやかに問いかけてもよい。

幻や夢の中にいるシテに問いかける場合は、一虚一実哀殺の音と云い、どの家でもそれを秘事としている。物狂の曲にみる応答は、僧侶や俗人のどちらのワキもきれいに謡わず、しつかりわかるようにするのがよい。身分の低い者への応答も同じような心得を持つべきである。鬼神または人に暴力をふるうシテへのワキの応答の仕方は、少しも弱みを見せず趣もなく、厳格な心で謡うべきである。

以上のように書きはしたものの、だからといって頑張ってあまり上手にしようとするのは、かえって良くない。ワキ謡は大きな抑揚を付けず、スルスルと謡うことがシテに對する礼儀である。シテの心持も同様でわざわざ書き留めるには及ばない。その謡ごとに応答の仕方は、おのずと定まっていくなのである。とはいふものの、応答の仕方の心得をわきまえずに謡う人は、達者とはいえない。

以前に、ある批評したがる人の前で〈清経〉の曲舞からキリまでを所望によつて謡つた際、謡い終えた後に「修羅の謡にしては少し弱く感じます。」と言われた。その返事に「修羅の謡い方も修羅の内容によつてくるものです。〈清経〉は左中将の公家なので、武將の修羅よりも少し弱めに当家では謡っているのです。仏典に現在の果をみて未来を知るといふ優れた言葉があります。」と答えて差し上げたところ、そこに居合わせる人々になるほどという人が多かつたのである。

さて、またシテツレ・ワキツレともに、シテ・ワキよりも音の高さを下げ気味に謡う習わしがある。シテの謡い出しよりも半字分ほど後にツレが遅れて付くとよい。シテと同時に謡出すと必ず揃わないものである。シテが謡い出したあとにシテの謡を真似て、まるで一人で謡っているように合わせるものである。

概してツレ・ワキに限らず、囃子・狂言に至るまでシテに従うことが肝要である。また地謡の謡い方も前述したような心持で謡うべきである。しかしながら、地謡はどんな曲でもその位よりもすこし強く謡うことが慣例である。

【解説】

座敷謡とは、座敷などの小規模の室内で演奏される謡を指すもので、能舞台上で上演される謡の様式と異なる。座敷謡の演奏形態には、独吟や連吟などの素謡のほかに、謡と囃子や囃子のみなど、様々な組み合わせがある。

『うたひ鏡』第七条では、主に座敷で謡われる素謡に焦点をあて、歌唱技法や心構えなどを実践的な事例とともに説明している。

最初に、座敷の広さと謡の音高の関係、シテ謡とワキ謡の謡出しの注意点が述べられる。座敷謡の音高の記述に關して、歴史的に謡伝書で確認すると、世阿弥『申楽談儀』（室町前期）において「調子を音取りて、謡ひ出べし」と記される。当時、謡出しの調子を一節切で音取をして整えたようであるが、具体的な調子はまだ示されていない。のちの『八帖花伝書』（室町末期）には、小座敷が平調、広間は双調、『五音觀世道見書物』（成立未詳・永正元年奥書あり）には、小座敷が平調、大座敷は双調・黄渉と記されるようになり、『うたひ鏡』の記述と一部類似する。

続いて、次第や論義の部分に關するシテ・ワキの謡い方や心得について言及している。次第における「関守・人あき人」、「女の類・児童の類」、「僧俗ワキ」、「鬼神ワキ」などの役柄の箇所では、『八帖花伝書』と内容が部分的に一致する【参考】②参照。また、論義とは、本来仏教儀式の問答形式に由来するものであり、能においても、役と役、役と地謡が交互に謡う問答部分を指す。さらに現行では、明確な平ノリの小段である「ロンギ」に細分化

している。第七条の「論義」の記述を見ると、現行の「ロンギ」に限定した内容ではなく、台詞とうたの両方を含む広義的な問答部分を説明したものと推測できる。

最後の部分では、『うたひ鏡』の筆者が座敷で独吟を演奏した際、その演奏に対する批判を受け、家の芸風による解釈の違いによると説き伏せた事例を挙げる。このような実践的な座敷謡の記述は、管見の限り他の謡伝書において認められず、『うたひ鏡』筆者独自の視点を強調するものといえる。

【参考】

①『申楽談儀』

一、祝言は、呂の声にて謡ひ出べし。深き習ひ有べし。まさしく、其座敷にての時の調子は有もの也。此座敷にてはいか程成べきがよかるべきと、勘へ見べし。先、心をよくそれになせば、一日二日稽古したる程にむかふ也。能々心を静め、調子を音取りて、謡ひ出べし。

(表・加藤校註『世阿弥禅竹』1974：275)

②『八帖花伝書』(『うたひ鏡』に対応する箇所) 傍線を付した)

一 座敷にて謡の調子の事。小座敷にては、平調より謡ひ出し、双調に上げて、謡ひ留むるなり。(一) 広間にては、双調より黄鐘に謡ひ留むるなり。

(林屋校註『古代中世芸術論』1973：530)

一 つれに立候者、謡ひようの事。大夫より調子を乙らせて謡ふべし。付合して、謡ひ出すを聞き、文字一半分ほど、遅く付るなり。大夫と同じやうに謡ひ出し候はんと思ひ候へば、謡出揃はぬ物也。付合、いかにも、そぐぐになきやうに、一口にて謡ふ様に聞え候やうに嗜むべし。大夫の謡、よく吟じうかがふて謡ふべし。もし、大夫より早く謡出す事など、沙汰の限り恥辱也。たとひ、大夫下手にて、つれ上手成共、大夫(へ)付けべし。惣別、つれに限らず、諸役者、共に何と

上手の寄合にて、大夫一人下手成共、大夫をうかがふべし。

(林屋校註『古代中世芸術論』1973：547)

一 脇、為手に謡ひ掛けやうの事。女の部類・児童の部類などを、いかにもしとやかに、荒々しき事を去り、しなふ心に問ひ掛け候なり。

一 鬼神に物言ふ事。是、いかにも弱味なし、強々と面白がらせずに、たしやかに問ひ掛くべし。

一 閑守などの脇、いかにも萎れぬ心を持ち、強々と謡ふべし。

(林屋校註『古代中世芸術論』1973：553)

一 一人商人、是も、いかにも萎れぬ心を持ち、強々荒々と謡ふべし。

一 物狂の仕手に問ひ掛けやう。美しがらせずして、たしやかに問ふべし。

(林屋校註『古代中世芸術論』1973：554)

一 惣別の脇、為手へ謡はせ様。いかにも面白がらせず、音曲がましき事もなく、たゞするく_レと謡べし。

(林屋校註『古代中世芸術論』1973：555)

一 座敷謡、鼓なき時の謡やうの事。謡ひ据ゑ候処、大略のところ、謡ひ据ゑ候がよく候。

(林屋校註『古代中世芸術論』1973：556)

③『五音観世道見書物』

一、座敷うたひの次第の事、その座しきの人数に随へし、小座敷など、又は十人ばかりほとんどの事ならば、平調など二定て、こ
うたひをうたふべし、大座敷ならば、双調、黄渉などにてうたふべし、先一番の謡ハ、人の耳に入ほとに、はたくと詠
みだして、人の心をしつめさせて、次第く静に曲すべき也、その座敷の人数程、ながきうたひを□たひてよし、謡を
さげて一ツいひ出し、後ハ上ていひいたすべし、口伝あり

(法政大学能楽研究所般若窟文庫 <https://nohken-komparuhosei.ac.jp/books/large/1098/1>)

(高橋葉子編「永正元年観世道見在判伝書」翻刻データ参照)

<https://rjtm.kcuu.ac.jp/archives/kanzedomizahandensyo.html>)

(坂東愛子)

